

平成30年8月20日

レフェリーレポート

川端祐貴・今泉暢禎

1. 参加大会

平成30年度国民体育大会 第38回九州ブロック大会

日時：平成30年8月18日（土）～8月19日（日）

場所：鹿児島県霧島市 国分運動公園体育館他

2. 競技

大会1日目 8月19日（土）

◇朝のレフェリーミーティング（ホテルロビー）

●児玉浩三郎九州理事長

- ・各県の最強チームで本国体を目指してどの県も本気で取り組んできている。ハンドボール関係者のみでなく行政関係の視察団など多くの人が見る事になる。レフェリーもそのことを十分に理解して行動を行なってほしい。
- ・給水タイムを今大会では採用する。この夏に行われた数大会で実施してきているが、レフェリーも14分～15分あたりで意識をして、TDがタイムを止めやすいタイミングを作ってほしい。

●福島亮一審判長

- ・鹿児島県は来年度ジャパンオープン、再来年度に国体を控えている。今大会に関わる競技役員が多くがそれらの大会にも様々な形で関わってくれるはずだ。共に準備をしていくという気持ちで、改善を図っていき、良い関係づくりをしていってほしい。
- ・昨日の代表者会議でも確認をしているが、レフェリーは○と×をしっかりと伝えるのが仕事である。許せる行為と許せない行為をしっかりと線引きしてほしい。
- ・本大会はすべての体育館に空調が入らない。体調管理を各自しっかり行なってほしい。給水タイムはレフェリーにも必要である。有効に使おう。

◇担当試合

○少年男子1回戦 鹿児島県 41－18 佐賀県

- ・少年カテゴリーの試合ということで、とにかく丁寧に判定をしたり、基準を伝えたりということに気をつけて試合に入った。
- ・点差が前半のうちに徐々についてきたために、笛を少なく試合を流すことを考えて試合を進めた結果、退場は1回のみという落ち着いたゲームであった。

○少年男子1回戦 沖縄県 31－25 宮崎県

- ・1試合を通して影響を見ながら接触については判定をしていったが、チームサイドとの感覚の溝がなかなか埋まらなかった。8の3にある判断基準を再度熟読してより明確に説明ができる準備をしておかなければならないと感じた。
- ・ステップの見極めが難しかった。ベンチからはオーバーステップのアピールが多くあったが試合序盤の基準を1試合通すことを大切にしたい。
- ・7mTの際にフェイントをかけた時に軸足でない足がラインの前に出た。ラインクロスにすべきであったが初めてのケースで瞬間的に判断が遅れてしまった。

◇会場での反省会（霧島市隼人体育館）

- ・流血時に用いるビニール手袋・雑巾・袋・消毒スプレーなどが入った止血セットを準備すべきだった。看護師さんは来てもらうだけで、協会サイドで救急セットを準備しておく。

- ・サイドシュートの際にコート外に足が出ている場面が数回見られた。
- ・スローオフはきちんとラインを踏んだ瞬間に丁寧に吹くこと意識した方がいい。
- ・カテゴリーの違いによって罰則のラインを変えるべきだ。成年では取らないものも少年では注意やYCをつかいながら丁寧に判定をすべきではないだろうか。

◇全体反省会（京セラホテル会議室）

○児玉競技委員長より

- ・キャッチネットは奥のネットに重なる状態でなく、ゴールポストと奥のネットの中央辺りに垂れ下げる状態になるのが正しい設置の仕方である。フロアに付かない長さにすべきである。
- ・コーチングゾーンはハーフラインから12mに設定する。7mラインと9mラインの間の位置になる。

○福島審判長から

- ・大会を重ねるたびに改善がなされていくために、競技担当者（会場責任者）も含めた形で反省会を行うことが好ましい。今回のような形を他県での大会でも行なってほしい。
- ・会場に到着したらまずコートのチェックをいただろうか？コーチングゾーンやネット、デジタルタイマーのコード、ボールなど確認すべきことはたくさんある。会場に到着して会場が出来上がっていると思ってはいけない。安全面などを考えて、競技役員とともにコートの最終確認を行うこともレフェリーの仕事と捉えるべきだ。
- ・レフェリーが試合前にすることは多い。オフィシャルやチームサイドとのコミュニケーションをしっかりと取っておくことが実際に試合の中での判定の説得力が増す。
- ・成年を吹く時は何が起ってもいいように準備しておく。起こり得るラフプレーの幅がとても広い。試合の序盤にレフェリーを試してくることも大いに考えられる。
- ・何事も先手を打つ気持ちを持っておく。例えばGKが胸部でセービングをしたらボールが濡れているのではないかと考え、先に選手に問いかけるなど選手やベンチから言われてからするのではなく、あらゆることに気を回しておくことが信頼関係に繋がる。
- ・8の3、8の4、8の5の項目をしっかりと頭に入れておき、機械的に判断基準を組み合わせながら判定をする。8の4にある項目を頭に入れておき、それらに該当する行為については機械的に2分間退場を判定しなければならない。
- ・判定をする時はDFプレーヤーを見て判断する。その後にOFプレーヤーを見て影響がどうだったかを見て最終的に判定する。多くのレフェリーが観客の目線でOFプレーヤーを中心に観察をしていないだろうか？判定の精度を上げるにはDFプレーヤーを見る視点を育てることが有効である。一度試合の映像をDF中心に見てみると視点が変わる。大会前に10分でもその視点でゲームを見ておくとアイトレーニングにもなる。
- ・失格に相当するプレーが出た場合は、必ずペアで寄って確認をする。そして、選手への影響や損傷度を見て判定をする手順を取ること。決して片方のレフェリーが単独でレッドカードを上げることがないようにしなければならない。感情的に判定したように見えてしまう。

大会2日目 8月20日（日）

◇朝のミーティング（ホテルロビー）

●福島審判長

- ・この大会中に経験して学んだことや知識・情報を各県に必ず還元してほしい。
- ・今日は本国体の代表権をかけたゲームとなるので昨日の反省会で確認したように、どのようなことが起こっても対処する心の準備を常にしておいてほしい。
- ・割り当ては準決勝までは発表したレフェリーで担当するが、決定戦と決勝の担当は勝ち上がり次第で決定する。全ペアが2試合担当する準備をしておいてほしい。

◇担当試合

○成年女子準決勝 熊本県 28—27 鹿児島県

立ち上がりの基準づくりを丁寧に行うこと、○と×をはっきり判定すること、DFをよく観察して判定をすることを課題に試合に入った。ピボットの攻防とエリア際のプレーに関しては序盤にもっと介入して整理をする必要があるしもっとできたと反省した。後半は試合がスムーズに流れていき、延長戦に入ってからミドルシュート等でうまく点数を重ねた熊本が勝ち切るゲームとなった。

◇福島審判長から

- ・日本リーグの上位チームや男子のチームの場合は、淡々と落ち着いてという雰囲気では収まらない試合もある。強く伝える手段や方法を工夫してほしい。チームが判断に迷うような場面での「スローイン」「流すジェスチャー」などメリハリをつけて判定すると強さが出る。
- ・前半に笛が多く感じたが、序盤なのであえてしっかりと判定をしていくことも間違いではなかったかもしれない。ただし笛を吹いてしまったことでボールを所持したチームが不利にならないように判断をしなければならない。その点では立ち上がりの時間帯以外はその判断がうまくできていたし、後半不必要な笛がなくゲームが流れていたのよかったです。
- ・IHFが求めているものに、試合を止めずに口頭やジェスチャーを用いてうまく基準を伝えたり、注意をしたりしていくことがある。ピボットの攻防でユニフォームを掴む行為がCRから見える場合に、ジェスチャーだけでなく、全体に聞こえるように「掴まない」「離せ」「あなた」などの言葉を強く使うことも試してほしい。

○成年女子3位決定戦 鹿児島県 36—12 大分県

- ・日本リーグチームの鹿児島とクラブチーム中心の大分との対戦であったために、体格差があるために基準をどこにおくかが難しいゲームであった。
- ・再三鹿児島ベンチからはオーバーステップなどのアピールがあっただが、基準を変えずに両チームに怪我をさせないこと、大分の良いプレーを引き出すことを考えながら吹笛した。

3. 今後の課題

日本リーグが9月に開幕する。競技規則書をもう一度熟読して理解を深めておきたい。判定の精度をよりあげることはもちろんであるが、判定の説得力や役員・選手との信頼をさらに高めるための手段や方法をさらに身に付けていかなければならないと考えている。自分たちペアのハンドボール感を表現して、チームトレーニングしてきたことをコート上で発揮させること、そしてハンドボールという競技の魅力を引き出していけるレフェリングに向けてさらに研鑽していきたい。

4. 終わりに

レフェリーとして大会に参加して自分自身の任務に専念できるためには、実に多くの人の助けがあるってこそだと改めて感じた大会であった。福島九州審判長、奥山副審判長をはじめとした鹿児島県ハンドボール協会の方々の方々の今大会に向けて準備をしてこられたご労苦に感謝している。また、会場には空調のない体育館の中2日間終日オフィシャル業務やモップ担当として協力してくれた中高生の存在もあった。ひとつの大会が成功するためには多くの人の関わりが必要である。TD・オフィシャル等の競技役員と協力をしながら1つ1つのゲームを作り上げていくという姿勢をレフェリーが持つ重要性を強く感じた。福岡県では10月に九州JOC、サニックス国際ハンドボールカップと大会が続く。県として一枚岩となって準備や運営を行なっていけるよう体制を整えて行きたい。